

常陸牛を育てることは地域の宝を育てること。
地域のブランドを育てることを誇りに思えるような環境を作っていきたい。



▲肥育のコツを笑顔で話す宇都木さん親子

ブランド和牛の名に恥じないよう、試行錯誤しながら独自の肥育方法を生み出したのが長島勝男さんでした。その技術を自分のものだけにせず、肥育仲間と共有したり、定期的に意見交換などを繰り返したりと、地域全体で技を磨き、肥育農家のレベル向上につなげてきました。最近では、若い世代の担い手も増えてきましたが、肥育に関する知識や経験が圧倒的に足りません。それを助けるために、肥育の先輩たちが丁寧にしっかりと指導することで匠の技が着実に継承されています。

継承される匠の技

受け継いだ技を絶やさない～次の世代につなぐために～

宇都木孝浩さんと殿塚正章さんは会社員から転職し、親と一緒に肥育を行う事を決め、親の世代からバトンを引き継ぐことになりました。「牛舎の掃除や朝・晩の餌やりなど、牛の世話には休みがないことが会社員の頃と全く違うので、慣れるまで苦労しました」と宇都木さんは振り返ります。愛情を込めて育てるため、細かなところまで気を配る必要がありますが、親子で力を合わせ助け合いながら取り組んでいます。また、「経験年数の少ない自分からすると、すぐ相談できる人がそばにいるのはすごく助かりますよ」と殿塚さんは話します。若い生産者が

親から子へのバトンリレー

平成20年2月時点で全国に約8万戸あった肉牛肥育農家は、平成29年2月では約5万戸に減っており、全国的に後継者不足が課題となっています。古河市においても常陸牛の肥育農家の高齢化が進んでおり、後継者が見つからず、休業する人たちも出てきています。そんな深刻な後継者不足の中でも、一筋の光も見えてきています。

減り続ける肥育農家



▲常陸牛の肥育を行う生産者(左から殿塚正章さん、宇都木一夫さん、長島勝男さん、羽部信男さん、宇都木孝浩さん)

最高の常陸牛を育てるために必要なものは「愛情」と「管理」。
365日、顔を見て話しかけることがおいしい肉質を生む秘訣。

古河で育まれる常陸牛

常陸牛というと、茨城県東部・北部で肥育されていると思いませんか。実は、茨城県西部でも盛んに肥育されていて、県内の出荷頭数の約21%を占めているのです。

県西部の中でも古河市の生産者が肥育する常陸牛は、出荷頭数はさほど多くはなくても、肉質が非常に良く、和牛コンテストなどで優秀な成績を多く収めています。

畜産のイメージがあまりない古河市で、なぜ、これほどまでに最高品質の常陸牛を育てられるのでしょうか。取材を進めていき、そこで垣間みえたのは、「常陸牛にかける愛情」と「肥育管理」でした。

肥育とは小さなことの積み重ね

「時間さえあれば牛の顔を見に行き、話しかけ、目、耳、鼻などを注意深く確認している。そうすれば、ちょっとした体調変化に気づき、牛が健康でいられる最善の処置をすることが可能になるんだよ」と話す匠たち。小さな積み重ねを継続することで構築される、人と牛の信頼関係こそ、最高の常陸牛が生まれる秘訣だったのです。



▲意見交換を行う殿塚さん(左)と宇都木さん(右)

牛の世話をしていく中で、体調管理や牛舎の清掃を行うタイミングなど、判断に困ったときにすぐ相談できる人がいるということが、何よりも心強いものなのだと感じました。

次の世代につなぐ役割を

宇都木さんと殿塚さんは「もっと若い肥育農家を増やして、市の畜産業界を盛り上げていきたい」と話します。常陸牛の肥育が魅力的な職業になるような環境を作り、次の世代につなぐことがこれからの目標になっています。